2010.7.20(火)

徳島新聞

子育て 健康&医療

はぐくみ支援セミナーから

子育て支援に携わる徳島県内のボランティアリーダーらが、子どもの健康や発達、医療について理解を深める「はぐくみ支援セミナー」（代表世話人・松岡愛隣園市民病院副院長）が、徳島市内の県立総合福祉センターで開かれた。徳島文理大学人間生活学部教授の島治伸さんが「特別な支援が必要と思われる幼児への対応」、徳島大学大学院講師（眼科医師）の四宮加容さんが「斜視・弱視について」と題して講演した。

特別な支援が必要と思われる幼児の対応

子ども見る目 育てよう

島治伸徳島文理大教授

島さん

子どもに支援が必要かどうかに気付くには、観察記録を残すことが大切だ。そうすれば療法策を検討する材料にもなる。いつ、どこで、何をしたときに、問題行動があったのかを具体的に記録する。表情以外に細かい言動の「表れ」を観察する必要がある。大人がきちんと子どもを見る目を育てなければならない。

問題行動を起こす子は、コミュニケーション力が育っていないことがある。それを育てるには、原因を考えないといけない。

例えば、大人があいまいな言葉で話すために、子どもに通じないこともある。「ちゃんと片付けて」と言われても「ちゃんと」の意味が理解できず、何もしないで怒られる。理由が分からず、パニックを起こしたり泣いたりする子もいる。「箱に入れて片付けて」などと言えばいい。

子どもにレッテルを張らず、行動の意図を受け止めて理解することが大切だ。

大人は子どものできないことに目が向くが、子どものできること、得意なことを伸ばそう。

子どもの障害に気付いて悩むのは保護者。子どもに必死になる保護者には、肩ひじを張っていると気付かせる必要がある。逆に、子育ての知識がなく障害に気付かない保護者は、保育園だけではなく地域全体で支援しないといけない。

保育園以外に、県発達障害支援センターや県総合教育センター、福祉事務所でも、子どもの発達に関する相談を受け付けている。小学校入学前には、子どもの様子や支援方法を保護者が記入し小学校に伝える就学支援シートなどを活用するのもいい。

早期発見・早期治療を

斜視・弱視

四宮加容徳島大眼科医師

四宮さん

斜視の原因は分からないが、治療は、眼球を支える筋を付け替えて正面に向かせる手術をする。遠視が原因の調節性内斜視は、遠視を矯正する眼鏡を掛ける。悪性腫瘍の網膜芽細胞腫も斜視になる。命にかかわる病気で、一日も早い治療が必要。2歳までに発症することが多い。

一方、弱視（医学的弱視）は6～8歳までだと治療できる。症状は▽絵本やテレビが見えにくい▽目を細める▽物を斜めに見る―など。

弱視には▽両目が遠視・乱視になる屈折異常性弱視▽片目だけ遠視・乱視の不同視弱視▽斜視による斜視弱視▽まぶたが先天的に下がる眼瞼下垂などで片方の目に光が入らない形態覚遮断弱視―の4種類がある。

治療は原因の除去。屈折異常なら眼鏡を使い、視力の左右に差があれば健眼遮閉、つまりアイパッチで健康な目を1日数時間ふさぐ。治療期間は年齢が上がるほど長くなる。早期発見、早期治療がいい。

◇

次回は29日午後6時半から県立総合福祉センター。テーマは「発達障害児の保護者支援について」（上岡義典発達支援センターとくしま所長）と、「食物アレルギーの機能作療法について」（竹内啓男福度保険鳴門病院小児科部長）。参加登録100円。誰でも参加できる。